

類型論から見る言語の世界

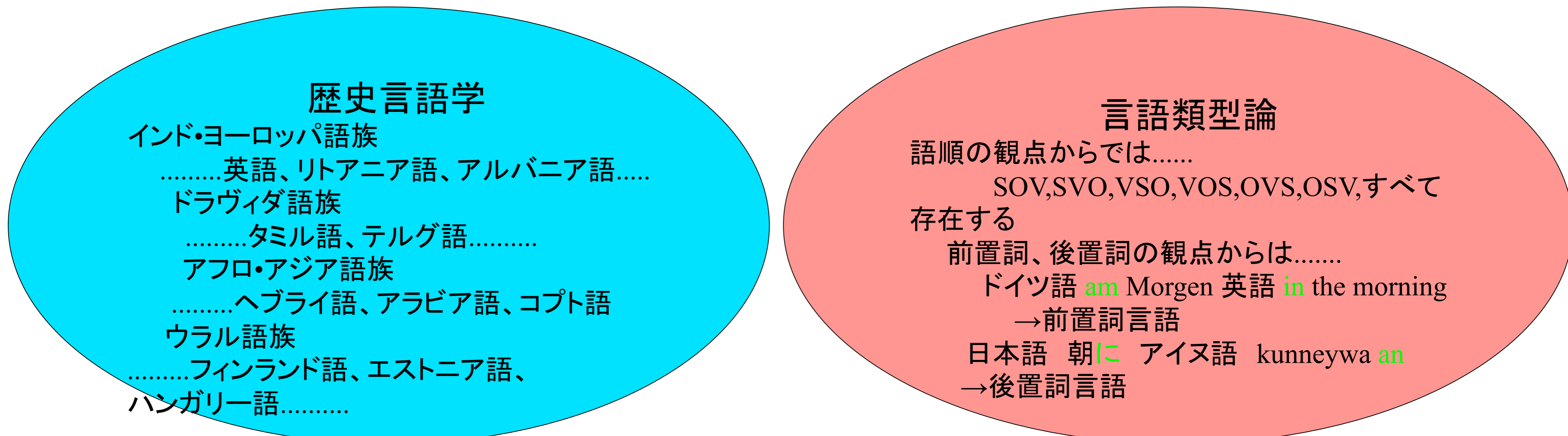
小野 洋平

総合研究大学院大学 統計科学専攻 5年一貫制博士課程4年

1研究の背景～歴史言語学≠言語類型論～

言語を「インド・ヨーロッパ語族、ドラヴィダ語族、アフロ・アジア語族」などといった系統的な観点から分類を行う「歴史言語学」とは異なり、もっぱら言語の形式面から言語を分類する学問を「言語類型論(Linguistic Typology)」といいます。

たとえば、「語順」の観点からは、日本語は「SOV」、英語は「SVO」、アイルランド語は「VSO」、トンガ語は「VOS」、ブラジルの少数言語ヒシュカリヤナ語は「OVS」、シャバンテ語は「OSV」となります(なんと、6通り全部存在する！)



2言語類型論の2つの目的

2.1 **言語の形式的な多様性から、普遍的な性質を導く！** →例えば上唇と下歯をつける子音は無い

2.2 **言語のパラメータ間の相互関係を解明する。**

→今回の研究では特に後者に注目します。

3先行研究

言語の形式パラメータの中でも「語順規則」について世界の言語の分類を試みた場合、「側置詞」が分類の指標として重要であることは従来より指摘されてきました(Greenberg(1966),Hawkins(1983),Bybee(1990))。側置詞とは前置詞・後置詞の総称であり、後置詞とは、大学で、大阪に、の助詞「で」「に」をさして前置詞とはat homeの「at」をさします。

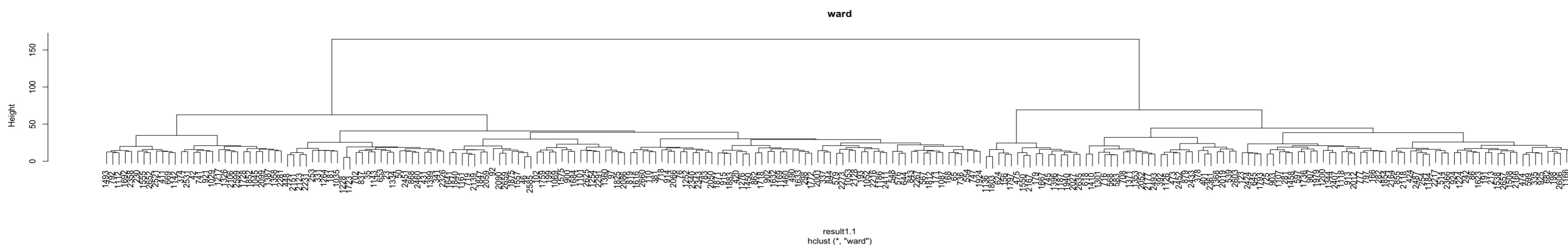
Tsunoda, Ueda and Itoh(1995)ではこれに「無側置詞言語」を加え世界の130あまりの言語の様々な語順に関するパラメータについて角田(1991)のデータを用いてクラスター分析を用いることによって、「前置詞をもたない言語(後置詞を持つ言語と無側置詞言語)」と「前置詞をもつ言語」とに高い精度で分類できることを明らかにしています。

ただし、角田(1991)は130程度までを扱っており、世界には5000~6000という言語があるといわれるなかで、ここから普遍性を導くには限界がありました。

しかし、その後、ドイツのMax Planck研究所の言語部門が言語類型論の専門家20数名を中心として、2660程度の言語とそれらに関する言語学の様々な分野(音韻論、形態論、統語論、語順など)の193のパラメータについてデータベースを作り、言語類型論の発展を推進しました。

4現在の状況

まだ、道半ばですが、Max Planck研究所のデータを使ってクラスター分析などを行って、様々な結果が得られ、国立国語研究所のJohn Whitman教授とともに解釈をしているところです。



5参考文献

Bybee, J. (1990). Asymmetries in the affixation of grammatical material, *Studies in Typology Diachrony*, Benjamins, Amsterdam.

Greenberg, J.H. (1966). Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements, *Universals of Language* (ed. J.H. Greenberg), 73-113, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Hawkins, J.A. (1983). *Word Order Universals*, Academic Press, New York.

角田太作 (1991). 『世界の言語と日本語—言語類型論からみた日本語—』,くろしお出版, 東京.

Tsunoda, T., Ueda S. and Itoh, Y. (1995). Adpositions in word order typology, *Linguistics*, 33(4), 741-761.